

令和5年度 幼児教育研修（新人）（足立区教育・保育の質ガイドライン）  
「保育の基本」（第2回）子どもを中心に考える実践の方法  
日時：令和6年1月23日（火）14：00～16：00  
会場：足立区生涯学習センター  
講師：日本体育大学 教授 齊藤 多江子 氏



受講者数 98名

保育者（大人）に求められること

子ども一人ひとりを、かけがえない存在であり、権利の主体としてとらえること

子ども自ら主体的に環境に関わり、自ら育つ存在であることを認識すること

特に3歳未満児の保育では

#### 発達や個人差が考慮し

- ・一人ひとりの子どもの発達や興味に  
 応じる
- ・一人ひとり生活のリズムやペースを尊重  
 する
- ・一人ひとりが安心・安定して過ごせる
- ・その子なりの過ごし方が保障される
- ・一人ひとりが十分に遊ぶことを保障する



安全にもつながり、  
事故を防ぐことにもなる

特に3歳以上児の保育では

#### 「個」の育ち⇔「集団」の育ち

- 一人ひとりの子どもが安定し、園やクラス  
が居心地がよい場所に  
➔遊びのなかで友達との様々な関わりが  
生まれる
- 友達と同じ場所で個々に自分のしたいこと  
をして遊ぶ関係から  
➔友達とのつながりを感じて遊ぶ関係へ  
➔グループやクラス集団で遊ぶ楽しさを実感  
できると子ども自身が集団を形成して  
いくように

各自が演習に取り組んだ後に  
「話を聞いて、担当しているクラス等において、今、課題だと感じてたことや気になった  
こと」についてグループワークをしました。



# 研修報告書より



研修後、各自が自園に戻って取り組むことを設定し、実践した後に報告書を書きました。

食事中に苦手なものが出た時にはこちらが量を決めるのではなく、子ども自身が自分で食べられる量を決めるということを実践していった。子どもが「これくらい食べる」と決めた量を見て最初は正直「もう少し食べて欲しいな・・・」と思う事が多かったが、食べ終えた後に「食べたよ！」と嬉しそうに話してくれたり、笑顔で食事を終える姿を見て、今までの自分の関わり方を反省した。子どもたちにとって食事はやはり楽しい時間であってほしいので、これをきっかけに大人の思いを押し付けてしまうような援助の仕方は少しずつなくしていくようにこれから意識したい。

午睡の時に自分のコットに横にならない子に「ごろんして」と言うのではなく「ごろんしよ！」と声を掛ける等、小さな事から気をつけてみた。トラブルが起きそうな時や、危険な時、いけない事をした時はつい、強い言い方をしたり、ネガティブな事を言ってしまったが、意識してみると、普段の生活の中でこれだけ言い換えられる言葉があるんだなと実感した。

保育室内の環境構成を今一度見直し、落ちついて遊ぶことのできるスペースや子ども達が遊びたいと思える玩具の用意、園庭などでは、コーナーわけをして一人一人が好きなことを十分に楽しむことができるよう、配慮しました。そうすることで、座って落ちついた雰囲気であそぶことができ、次の活動への促しもスムーズに行うことができました。

子ども達一人一人の遊びや日常生活でのアイデアを汲み取り、別の友達に共有したり自ら発表する時間を設けたりした。子ども達一人一人がクラスの一員であるという意識がより強く芽生えたような気がする。また、日々の生活の中で「〇〇をしたい」「やってみよう」というような言葉も飛び交い、一人ひとりが主体的に過ごしてく変化が見られた

その日の子どもの様子や人数に合わせて、玩具の数を調整したり、絵本を出したりなど、先輩と相談しながら臨機応変に環境を変えていった。その時々合った環境を設定することで、子どもたちは好きな遊びを夢中で楽しむ姿が増えたと感じた。日々、子どもの体調や様子も変化していくので、職員で子どもの姿を共有し、同じ認識で保育を行えるようにしてきた。

子どもにとって、自分の思いや願いを受け止めてもらうことが非常に大切だと感じた。研修後も余裕がなく「今は難しいからね」といっていた。その姿を見て先輩から「叶えてあげたいなら、待っててねと見通しが持てるように伝えたら」と声を掛けてくれた。今の保育はどうだったのか、振り返る習慣をつけたい。

小さなことで子ども達のがんばっている姿やできた姿を受け止めていくことで子ども達も喜ぶ姿が見られた。この姿が続いていくことで子ども達の自己肯定感も高まっていくのではないかと感じたので、続けて子ども達の姿をしっかりとらえていきたい。